



浮牡丹全傳
四

13
186
4上



浮牡丹全傳

團七黑兵衛船三撫
一寸德兵衛三依傳奇

前

天
180
4

於
186
4



小説浮世牡丹全傳卷之三

江戸 山東京傳 編

第一回 連印鈕號 下回

去程の八雲の病の床より日とあかりて巳の秋の末より。開胎も程りく
しるに、重垣の孝心深き者なれば母の病を愁る度限りなく。昼夜傍と
てまねど着病しるるが一日母の目睡りひまに。薬と煎つておひらる
さぬたに産ハ女子の命づくさす。長き病は疲さる人、身身あそも。
産の程もかがつうか。少しもをやく快気ありて。平産とふ人多し。
左に孕ハ男子なるものとす。やどい人も必すこの子にこそあらしめ
りもたれ身とたうめ。我身いらにならるべき。さづかひやと吐息して。

浮世牡丹全傳卷之三

一巻末

おとと洗し埋火も。きゆるをくりのちひなる。折しも病床小て嗽の音
くれば袖は涙とわい拭のか燃かぬる焼火となとひ紛して隔の障子を
ひくたよれど睡たまひいおけ氣持いいうふどや。薬せりちひいといひき。薬
茶碗とさし出せば雲は手よとら。今日いふた日おてをさし苦痛と忘れ
ゆゑおがえんど少し目睡つ。とつひつ八重垣が。顔とつらぐうちまわれん。
辛若面よあつて。瘦やとらうる体かれ不便のゆゑやとあ人も。それと
岩根の母子草子ハ親の為親ハ子の為又涙とわいしわい。心はうらや
わらんある。時は八重垣のひくた。け氣分うしてしらこべや。とくくけ快氣
あされく。お手冷べとけ埋火と湯漬いひつふとまからしく。愛の溢る髪
りきあでつ背後ままつて背中と撫てど居うらる。借水草ハ看病よわつ

て。ひさしく世渡の業とせざるうふ薬の價加持祈禱の施物など。亦ハ
病人の口おあふ食物ハ價の高もいふ。杯ハおのりうらうらづの費おわら
磯之丞が磯一おねる小づの銀ハ更かり。かのが終は貯一ツ二ツの着人。
解分の衣まぐも。皆米錢小くなして機織本錢さへ失ひれば。今も家内
わへるがごら。朝夕の烟も立ちぬ。困窮と病人は知せドと。つひらら
苦さハ何よたさへんかこをなく。せんさぶあさけ昼の間ハ八重垣よの香病
とまよせおたて。牛と牽てし。成相の觀音詣する人。或橋立遊覽の人など
のせて。錢の賃錢をとり。往及する二里三里。時雨りうらと寒天よも。汗を絞の
手拭は頭とつむ梳子の朱塗も元て本地も。縹模様の在所深。縫目よ
壁ハつりても。忠義よ凝し。志ハ砂の中の黄金うや。積木綿の下裏ハ

巳の時過る昼飯時牛の割毛の黒牡丹縁も深き早咲の冬牡丹の一朵と
牛の角は結付て我家は飯り牛と小屋よつちだて。身上の壺と打払い肝巾
草鞋ととさむて。近き流きよ足とをた。彼一枝と器は押して病床
とうかひ。今日ハ時雨空の寒ゆあめ。往來も稀よひ。のりもさう戻ひ
清気あひのいりにひやんととがぬれ。八雲ひらる。今日ハ氣持もよかど
うたゆあ一睡して今醒ぬ日毎くの外縁さぞ草臥もおかやん。我くか
薄命ゆあ苦勞とさる不便やと。溼がらなる詞なれば水草ハ熊をの
のせて。今様く可笑度ありしなど。氣軽な話も病人と慰る為なれど
心の裏ハ涙なり。又ひらる。の秋冬牡丹の一朵ハいまも答ゆんを。世もあ

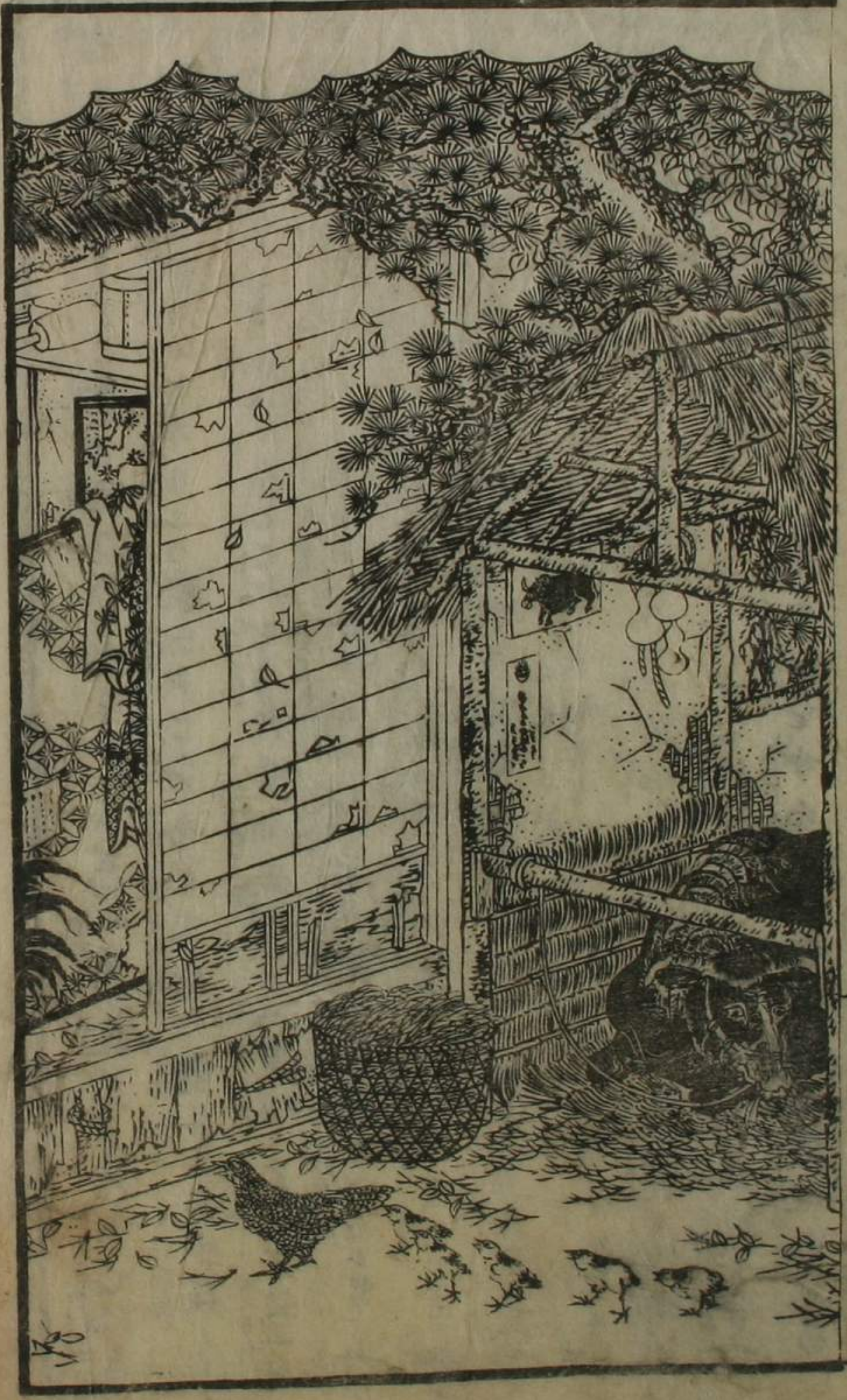
慰ももかれうと。費て戻りゆとさういせ。八雲とれとつくとて珍と
冬牡丹幽艶蒼なる。幸今日ハ豹大夫の命日。存生の時とさう花を
好きし。そちも知つること。これぞうれし手向物や。八重垣こそを父上の
霊前よとあつ。又今月今日ハ。碓之丞が誕生日。親子生死と同日よせられ
も。宿世の因縁ふこそわらわめといへ。水草のそく。妾も其変よ心つきの
ゆえ。御霊前のそか。物碓之丞様の陰膳。今朝おとさう心をうりてきて
おたぬとゆい。八雲ハ喜びて。何々。何きて心つひ。嬉しんぞやとつひ
八重垣よ。あつ。せよとつひつれ。八重垣ハこれとゆけあり。豹大夫が位牌と
取。て。西の方の壁際よ。皮箆とがりの経机。綾子模様の小服。昔の
残る鹿の子文字。位牌とも。香花と。午向の供物。早飯の食燈。火蓋。乃

冬牡丹幽艶蒼なる

三 尋常 重垣



舟生丹三郎



舟生丹三郎

舟生丹三郎

一滴も貪女の榨る身の油長者の家の万灯もまらうて冥途を照と
らん。東の方の壁際にお磯之巫が陰膳と水草を運ぶ赤の飯敵の首を鳥
蛤よ首尾よく仇と打鯨鱈よまきまき時到来に味のなら菜刀の光りと
鱈の臍は武運とひびく花籃室再手お入て會誓山よりぐを故郷の
袖の錦鯛鋼鉄犬き太刀の美の尾頭つき衣物も言事とゆを人意とて
酒肴まを取とてをなたりる。彼方へ精進手向の供物供方ハ魚類の祝
膳祝美不祝美一時間二分ていかけど夫と子の現世の旅は死出の旅哀同
哀なりハ雲へこれを見中つて貪中よりつる心冬一の獣立ハ殊更過分
をやとつひて手水乞て手ときり。髪をかきあげて病の床に居あぐも
武家の行儀と失い身又舊衣と打つけ霊前よむくの香と指水と手向て

あむくく拜しつひつる。夫の霊魂まあ水草が厚さ志のそく物富者の
十僧供養もおがいて替の下にて所受とこれ。か祈て兵学は通ト
軍器の妙ときりめ胸中小百千の兵とつるハあめ所身なれども欺打を
せんもくなく。飛道具の怒打鼻怯者の手はかつてあへるは最期とす。ハ
さど所无念はわりつらん。傾て磯之巫敵の首と霊前よ手向て修羅の宿恨と
そくさせやとと。所最期の苦痛のうちに磯之巫ハ重垣寺へ行とる
変などごと所心はかつて。其時とらひ中らどつるハくおがえい
又妻が身よおん遺留と病ぬれどもかく長病は痕さる身よとんま
とても安産はおかつつら。磯之巫が吉左右と喧ひまでせめてあぐく。夫と
願いへども彼今よかりて飯く。敵の行方ちれざる故と

あつれい。妻あがく。世よわ。べー。こまか。え。え。ら。移。ん。覚。悟。と。こ。も。め。く。
居。り。い。辰。は。宿。せ。一。孩。子。も。聞。く。聞。の。親。子。連。夫。の。死。路。と。慕。ひ。行。迷。い。
べー。こ。の。ろ。の。法。を。世。よ。わ。る。く。世。様。は。憂。甚。乃。つ。と。か。う。て。薄。命。た。う。
象。く。な。れ。ば。冥。途。の。苦。患。も。さ。ぞ。り。と。あ。ひ。中。れ。い。と。息。も。た。げ。ひ。い。
さ。し。て。悲。嘆。を。袖。と。ひ。く。一。れ。ば。傍。よ。つ。れ。と。あ。八。重。垣。の。冥。途。の。父。の。恋。と。
世。の。母。の。こ。の。こ。を。け。め。た。悲。さ。に。か。つ。る。涙。の。手。は。持。し。念。珠。の。緒。を。ま。て。
膝。の。上。の。珠。と。乱。れ。と。ご。く。や。う。水。草。も。こ。も。泣。伏。て。む。せ。ん。と。あ。の。こ。
あ。へ。り。る。が。八。雲。の。か。う。く。顔。と。上。の。一。枝。の。牡丹。の。花。の。富。貴。と。追。福。の。為。は。
そ。う。の。手。向。草。草。葉。の。陰。は。受。り。成。寺。正。覺。頭。證。菩。提。南。无。阿。弥。陀。仏。の。こ。
た。づ。と。と。う。つ。れ。ば。八。重。垣。水。草。も。同。音。は。六。字。と。な。り。て。居。り。り。り。諸。八。雲。の。

回。向。と。終。て。身。と。ひ。移。り。世。方。よ。も。あ。る。陰。膳。と。見。て。涙。と。の。い。笑。顔。と。つ。り。
て。ひ。ひ。る。の。出。世。と。移。り。若。人。の。誕。生。日。と。ら。ひ。殊。は。旅。さ。さ。い。と。い。し。陰。膳。と。
ひ。ひ。て。泣。顔。の。不。吉。や。う。や。一。之。聖。親。人。の。命。日。あ。れ。ど。真。類。と。す。ひ。ん。
旅。さ。れ。と。い。し。の。あ。る。父。も。こ。れ。と。あ。る。一。の。い。づ。き。あ。れ。ば。り。で。と。く。著。と。と。り。
の。け。よ。諸。今。は。於。て。飯。ら。ざ。り。の。定。て。敵。の。行。方。知。ら。ず。ゆ。え。あ。ん。今。頃。の。
何。方。の。あ。る。所。は。居。る。中。ん。病。の。居。ぬ。野。宿。な。と。せ。ざ。り。や。寒。天。は。
ひ。く。と。ら。ひ。貯。薄。き。旅。あ。れ。ば。さ。ぞ。憂。事。の。あ。れ。か。ら。旅。疲。も。さ。ぞ。り。と。
あ。ひ。中。れ。て。不。便。ど。や。都。見。物。物。余。慰。の。旅。で。さ。人。子。は。旅。さ。と。り。人。の。親。の。
苦。の。や。を。ま。く。ぬ。い。常。あ。る。に。況。復。離。の。為。は。出。る。旅。さ。れ。り。や。え。う。打。め。の。
あ。ん。き。う。と。あ。ひ。と。ご。せ。う。や。や。大。望。と。い。づ。者。の。第。一。は。身。と。保。か。

肝要ぞ。病りづらふてたそ人敵も出會ても。本望の達一がし。喻て
り。此冬牡丹の花雪霜は打きても。其志と人えげまされ。柔能剛
と制するあふひ。かくのごとくに蒼と生じて。國色天香。夏の牡丹は異なると
花王と人よおひんせらる。されば汝も志とえげま。忠孝二つを身よ
おわつ。霜の剣もつらむらむら。鏝草ともなうぬべ。誓と復し室を
得て。再家と興一あべ。それを孝子の名取草。養名と后は残るべしと。
眼前は居る人よ。りのりよごに教訓の母の情の深見草。夜白色草。山橘
の。薰ゆりしき詞か。再又のひらる。産月もわらう。産と知死期と
あひ居るま。りも。今生よ於て對面。かか入ま。八重垣が事とのじどやと。
祝心と忘さつ。おがえど涙をうく。陰膳の上は落つ。けき急ぶ

まどひて目と袖めをうく。玉椿の八千代まで。そのまもも。りも。りも。りも。
とやと。祝ありて彼方と見れば。香の煙のかもぐと。櫛の枝の白まを。无常
氣よ。かろそ。ま。物頼て。我身も。あ。の。ご。と。く。白木の位牌も。あ。ら。ん。で。血。り
池の。と。者。と。なり。水子と抱て泣く。死る我身。い。い。の。林。ど。跡。は。残り
子共寺の。さ。び。や。歎ん。か。ま。の。や。と。あ。へ。又。も。も。り。く。と。落。る。涙。と。か。え。つ
状方と向て。笑顏とほく。彼方と見て。は。又。涙。泣。つ。笑。ひ。つ。狂。氣。の。ご。と。く。
生別死別。吉凶も。う。く。胸。の。か。も。う。く。ま。て。泣。倒。ま。い。と
苦しげ。不。入。え。え。ん。へ。八。重。垣。水。草。り。そ。が。い。く。背。と。抚。薬。を。め。え。ん
な。ま。し。て。介。抱。し。る。小。良。あり。赤。起。上。り。牡丹の枝。と。り。あ。げ。く
の。ひ。け。の。へ。磯。之。巫。更。浮。牡丹の香。焼。と。かく。の。ご。と。く。手。よ。入。て。飯。を。ま。や

若亦其身又災のゆゑとや。吉かぐは災答のひらけり。凶かぐは災答の
 茶う。高野の山の万草草以八重咲八卦の敷七夫の灵魂花神の
 通し。告しゆあ人と念どる。陰膳よそんる。銚子と把答は酒とそんるふ
 めか不思議や。むろとひらき。牡丹花の色香とそんる露とくこと勢ひ
 むれ。喜べしや珠しやとつひて。やうや愁ひの色とそんる。真の笑顔よ
 かりるあぞ。八重垣水草寺もそんるこれと喜びぬ
 ○以後砥之巫族中は於て危難とまぬりや夏わり。これ母の一念
 通して救ひたり疑なり。其前は花神且災吉兆とわらひし
 つ。ゆめをなすべし。砥之巫ヶ危難の夏後帙の首巻あり
 借八雲いと疲れん。かの牡丹花とやうい器は碎しめて。灵前よと夏

かうせ屏風立まりて打卧ぬ八重垣の香と盛く人仏灯は油とへ。
 水草の陰膳とさうとそんるなとして。以日の別は物語るべき夏かうり
 夕つりて又一日水草八重垣はむらひていひたりん。母上さるもや来月の産
 月にてゆんを。兎角気づり。そのいふれと薬の験も見えざるん。
 臥し人へ仏神の擁護と祈がふらう外はゆま。垂い今夜と始にして成相の
 観音は夜祭し。通夜して祈やとづくそのいふれ。夜のうら何とを
 其方様は着病袷がひゆといへ八重垣いも。然る垂も昼のゆゆは彼
 観音堂は籠て。りろとも祈るべし。昼のそんるひとて小て者病頼ひ
 かりとつひかそんるたむがし。めりかり。直夜二人して祈願し。いひて。
 とかどけの隣もなれ深くいりんとりひて。これより水草は毎夜子の刻乃

ころころ家を出て曉はぬ事連夜ふて雨つら夜も風わつた夜も
ゆづる夏あがりりり八重垣の日毎は朝飯をぐる頃より家を出て
夕ふ飯る夏連日たり然も八重垣夕終日観音堂又菴居といふ偽り
毎日家と出る始はまぐ観音又衆て祈念しとれり海松峠より
古編笠は顔とかくして破を扇と把布の袋と懐より往來の人の
袖をとり一銭二銭の情とを又へ映彼の村とりのき人の門より
米麥の類と乞受其錢は母の喰はかみふべき物産養より物など
いとゆる料となし其米麥は夜中食する料とをこへ母病又臥て
しり殊更又費おかりかりて水草が貧は苦むと見るよあひびせめて
露むりのれをけふもわんわんとあふ心しりかふる夏とあひつたぬ

されど水草はかくと語りてへとむるの必定とあひ母小もつらど泳く
かくしりるにぞ母も水草も秋事とをこへも知事ありたりかくて
一日八重垣いつもの如く海松峠は到りり素生をつき養麗愛の
溢る娘小て色香も深き窓の梅年十五の初花も貧とりふ字の
古枯は人の落葉の秋の果針目からなる振袖の懼し顔は霜の花
氷は足とやふられて流る鮮血は散紅葉を踏ぐまののりさりの
坂道とゆきとびとちりゆれかりて交加人よつと長くの浪人よお情
の施しとと腰屈ついと慙げふつひて物乞さる哀さなぞいよあひ
往來の人にもさるぐの心ありて袖はすげると顔とれせど過るもあひ
後よつと穢はしを巧よ傍近く寄なりと叱つ去もあひ

憐憫の心ある者稀なる。總は情心ある者。あかかまのや。編笠とり
顔の便娟さといふれば。賤かざる娘なるに。袖乞とする。いふあるゆゑど
定てよりある人の零落て貧さに堪ど。かる業とゞさをなすん
不便さよといひて涙流し。一錢二錢とて通るもあり。或はりの
哀と。さましくぬ輩のこれを見て。彼が。娘は袖乞さる親め
よ。因果のあつた奴。彼が親め。何者ありん。武士の浪人の娘さ
見ゆるが。不忠不義と。かして追放され。禄盗人のたぐひなるら
或は武辺者又出會て耻辱と。腰抽武士たる。果少や。何と
われ。と。娘は袖乞さる。夏。傀儡かど。賣べら。價は。あ。人
に。と。人。連。と。者。の。い。は。る。へ。左。の。あ。と。彼。が。親。め。癩。病。人。の。

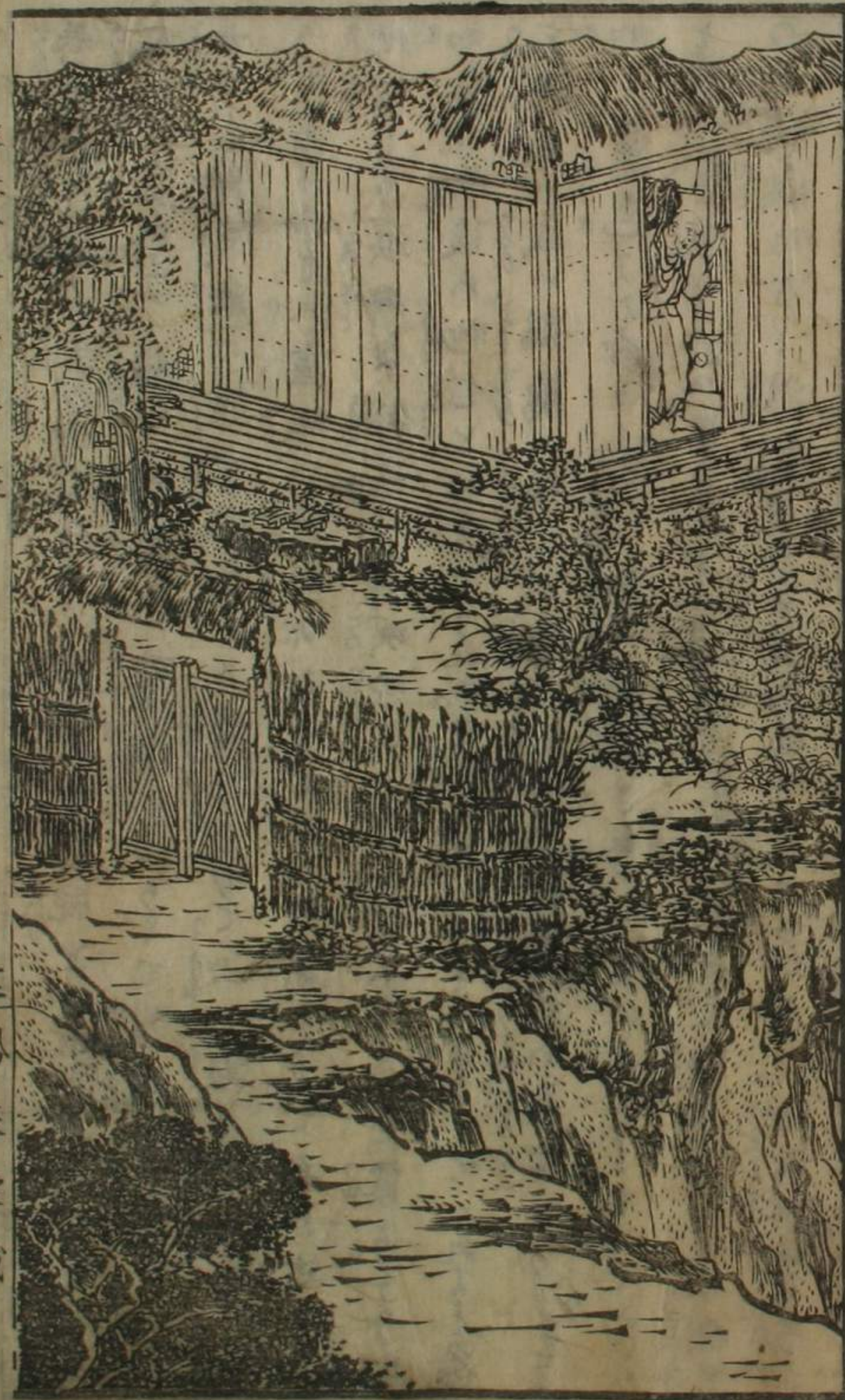
變。或はなまな。ぬ罪と。犯して。故郷と。逃。人。目。と。志。の。娘。なる。を。し。
さもなく。親も。とも。出。て。物。乞。と。さ。る。と。づ。なり。娘。の。さ。う。さ。こと
さ。さ。る。い。と。い。は。れ。て。邪。見。ある。奴。も。親。を。思。ひ。ぬ。娘。は。料。の。あ。り
べ。い。ど。艶。麗。娘。なる。小。一。錢。と。へ。て。去。べ。い。とい。ひ。て。懐。は。手。と。入。る。と。一。人。が
押。さ。め。て。い。か。く。や。め。い。か。く。娘。は。施。し。と。れ。ば。親。め。が。物。は。なる。道理。
さ。の。る。奴。にも。あ。ら。ぬ。餘。死。さ。せて。罪。め。ろ。が。さ。さ。る。が。か。へ。つ。て。慈。悲。ぞ。と。さ。も
悪。げ。よ。い。ひ。て。果。は。い。高。く。と。打。笑。ひ。物。れ。ぬ。う。へ。と。づ。う。う。め。く。
途。遭。も。の。り。け。り。八。重。垣。は。是。寺。の。夏。と。穿。て。胸。ふ。さ。が。り。かり。にも。親。を
詈。ろ。口。惜。さ。よ。と。丹。と。酸。涙。と。流。して。物。乞。は。是。限。よ。や。む。べ。い。と。さ。い
り。り。が。水。草。が。貧。苦。の。身。も。遙。ま。う。さ。り。て。愁。気。る。べ。い。と。翻。思。て。

か不物とて居らうらるが未とぐるらうらう。雨かふの天なるる小ど。
人の足早くうらうて。物のふいもあうらるればかぐら母ままわらるる
物もそのうらうら。今日ひむらう素手振て飯る更うと打らり色て
儲與るにちひうけど情深さ人わうて。錢二串米一升と与へられむ。
嬉しき限りわう。母ままわらるる物せえらるるのて携るる色
まわらせて母の喜ひあふ顔見んりのとたのつとつ飯んとせしよ。
物蔭しう塾ふけうと見えらるる乞丐の女寺のまこ出来りて八重垣を
さうかこらぬ八重垣と見らるるに頭は松蘿かつらうらるる老女も
あり。身は海松とまらるるらるるらるる老女もあり。脛は瘡どらるる小兒
と肌つけ小負らるるもあり。尻は棚つらうて趁跛ひくもあり。臭の腐から

らるもの。偏盲あるもの。缺唇あるもの。腮の下は癩さかりく壺盧の
實のどろろなるもの。眇躰と流とをあり。髪の毛赤く齒の黄と
らるものあり。都て汚穢げらるる女原身うち臭の鼻と襲て堪へ
儲伏者寺八重垣とむらうて口ぐらうらうら。そも汝のつぐらう
米りつら女ど伏死の乞丐村の者の物乞らるる所なれば伏して物乞
者の何者にもわれ我くが仲間らうらうてさるる定まるる。濫吹
伏所ふて袖をすうら定と破る曲者かりとらうられば八重垣は驚
てへらうらうら。難義とらひつ。胸のどらうらうてりくぐらせらうらうら。
時又齒の黄とらうら女臭と息と吐いてら。我くが定めて祀女也
後日の見せしめあ心の俵とあこらるるらうら。檻褻のそでと

浮世草子全集卷之三

二



浪舟の三槳
釣舟の三槳
丹後國の
若狭の
山中の
夜半の
見と
そらの



あひつらゝ。死神の誘きてゆく演づらん。雨と涙は濡髪乃。顔は
乱る横髪ぶら。細砂は足とふくくして波打ぶらと走りながら宮津乃の
磯辺の折節往來もなかりらんが所あり。五六尺をかりある岩の
うへのり。掌と舌と念佛と入る。おとく海底は身と沈んじと
る。忍五体とくみて動くまわらば。いらい小死るまゝ人なり。と
る益嘆とる時。雨やと空をれて月皎くとかやれ出る。前面の
岩の上は彩雲ととら異香薫とり。一個の娘く坐したまふ。
頭は九龍飛鳳の髻と結び。身は金縷絳綃の衣と穿。その上は
白羅衣とまとい手は物の枝と持。藍田の玉帯長裙と曳。白玉の圭璋
彩袖と撃げ。顔は蓮華の如くよ。天然の負目雲環と映。脣は

櫻桃に似て自在の規模雪體と端。うておのりま。ぬ。か。と。た
八重垣の身の動自由な。うら。うら。うら。と。岩の上は伏てこきと群
る。に。娘。く。玉。音。と。ひ。り。き。て。の。り。な。り。我。汝。が。死。と。と。め。ん。と。ち
よ。来。り。て。ら。に。あ。り。汝。前。毒。の。悪。果。よ。う。う。今。の。よ。の。あ。り。ど。
此。後。も。又。百。折。千。磨。の。苦。と。は。う。ら。う。ら。う。り。と。り。ん。と。も。い。と。
う。や。ま。い。孝。と。か。り。ん。ど。の。功。徳。に。し。り。て。つ。ひ。は。天。日。の。面。と。見。る。と。た
と。え。そ。富。饒。なる。身。と。な。り。ま。か。り。映。后。の。難。美。は。あ。い。と。も。
か。り。ど。死。ん。と。ち。あ。つ。て。我。異。日。再。又。會。と。る。の。あ。り。と。努。く
疑。こ。か。れ。と。告。め。の。冒。同。の。白。毫。う。一。條。乃。光。と。榮。し。八。重。垣。が
額。と。映。し。の。く。か。き。け。を。如。く。よ。失。ひ。ら。る。が。八。重。垣。が。額。の。痕。

忽瘥るるにぞ。奇異の多しとみ。成相の観音菩薩は姿と
現しあひて。妻が命と救ひに疑なきと。隨喜の涙とわじ。
以後も又さぬぐの難義はあましと告ぐ。いづなる夏目
と見らるるやん。さうなつひあ運とひくくとあれば未だありんこと
あひ。死とぞまうと其跡と伏拜と。髪結びあげていそげく家
ぬく。水草又ひりひて。急雨は道といそぐとてあやまちて坂より
落衣服と破りし。幸よして渾身のあざとひなれば水草の
是と實さし。その危き度よ母上さぬいそぐのゆきとあつひ
あふかねばさの度ハ語めふかるといひてあつひ。儲水草の毎夜
子刻のころより家と出て暁は飯直前の如し。柳丹後国天橋立の

日本三景の其一にして。好景絶妙の佳境なり。相傳彼鳥の神代
九世の時始て出来るゆゑ。九世と号するは又切戸ともいひたり
松林の裏は文殊堂あり。海底より出現あり。閻浮檀金の文殊廿
と安置を成相の観音の橋立の内なり。東は與謝の入海あり。ま
眺望無双の地なり。此海は文殊廿廿出現の所なりゆゑ。往古より
殺生禁断の掟さびく。若是と犯す者ハ生なき。簀巻とかりく
海底に沈むべき定めんべし。怖て漢せど。かのつら鱗魚の集るゆ
おかく。此所より一網とくさば。勞せど。あまの魚と取得べき。の
と。負者なり。いづる者もあづべん。重き罪はかこみれん。と
顧て。小魚一たは取者ハかり。然る頃日深夜より。りて

此海に盗網とくどと者ありて。此近きゆりの漢夫をよに
疑ひて。此地の主護職由良判官命とく。彼法令を犯曲者と
心をつけて捕べしとの責なり。んば漢者ごもたひにのひせそ
深夜に目代とわさ若曲者と見付かば鉦と打大鼓とあはして
號と。海に船と出さし陸に道と遮て。逃さぬ様は備と
なし手苦とさざめて待まらる。比し九月ありを小て一夜子の
刻過らる夜嵐ふつて降来る雨の足。細竹と乱せる如く。て
岩と碎る波の音。砲々と響て凌兢打し。浦遠く鳴てさるる
鉦と疑ふるに。櫓の音とさとりよして。漕来る小船あり。
枕人も打人も獨りて。りにも人目とさるる。体雨風と絶間

ふて。沖よも磯よも船見ええど。うねりやちひらん。馴し手繰の
網の綱を。うねり。網と雄手よりかけて。さつと入ていたがり
わけ。そこよとよと打まる。陸に關し漢者寺かくとる。號の
鉦を打か。し。那裡めても大鼓と打て號と傳へる。ほど。
その曲者よ網打よと叫りたて。枯芦の裏は。し。あれたる
船と出さし。陸に明松とさりつきて。其奴搦とさし。とど
ひしめぬ。枯芦の裏より漕出する二艘の船よ。漢人ごも
四五人づゑ。櫓とさやめて。彼曲者の船より。先兩人の
漁者。彼船よ飛らうて。曲者とさ。あさん。たるに。曲者一人の
腕首とく。捨て。一人の襟首。抱てひれを。兩人と一度よ

浮世冊全書卷之三
十八 鳥塚堂藏

投きバ翻りて海はざんぶと落ちてぞり。又一人が組つてを両手と
伸て。ちぐんでもゆる車投つてのわ尻肩も。打込投込早業
と。以方よ見居たる演者ども。曲者いたのれぬぞ油断をか一度
ふりつてのあそれと叫りて。わつらぐ。彼船よあうつら。擧とさうぞ
打倒さんとあうらるに。上とさうく。身とあうら。下とさうく。びとぞり
わら。前後左右よ身と避て。つひに擧と奪さう。一打うて。二三入
一度よ海へまらさう。素これの小船なれば。左右よぞうく。傾きて。
打こむ波の危げふ。わらと飛散水煙とさうら。立ちさう。曲者の蓑笠を
著たり。れば。顔も姿もさうら。杯と。手頭へやそく。瘦らるる体
腰いたふく。こしといと弱気よえゆれと。身のさうら。疾と。

雲よひらり。電光の如く。波よ交々。鶴よ似たり。なれば。近づく。と
捕ことあ。唯い。づらひ。ひらり。のとなら。陸よ居る。漢者等
以体と見て。又號の鉦大鼓と頻よ打なう。と。とひさう。おひく
集るおひく。の人数。数十の明松星の如く。と。か。こ。乱まらう。
磯山陰より。漕出と。わら。の船。艦。は。篝火と。や。し。波と。押切
さう。と。色。彼。船。よ。ち。ら。ら。さ。て。四。方。より。取。圍。ら。れ。ば。陸。も。海。も。白。日。乃
こ。と。と。わ。さ。う。ら。う。わ。て。わ。ぞ。く。逃。れ。て。さ。う。た。る。折。し。も。再。風。雨。は。ど
なりて。雨の車軸を流と。と。と。と。風。の。波。浪。と。ま。ら。わ。げ。て。船。の。篝。火
陸の明松。一度よ消て。真の闇。の。ま。ら。の。漢。船。波。よ。中。れ。流。さ。ん。て。
遙。以。方。よ。と。な。れ。ら。る。が。以。ひ。ま。に。曲。者。の。中。へ。も。ら。れ。ど。か。う。ふ。け。る。と。

かくて又一目漂木の巷の商人二人連よて水草がりて来り。懐手
あつて足めて竹の簀戸とおしわけつと裏よりて水草後家へ宿
よつとよみれど水草へ竈の辺より。手拭りて手とぬぐひて出来て
これつゝ米屋さぬ古手屋さぬ。秋寒天のいとひもやううこと
おとおろりともはら見ても若くし殿よりと愛敬顔よ溢しつ
りんば。商人の簀子のよのしわけり。先米屋が小ぢりえつと
つひもつこれ水草其虚愛想よわざされて。これまでつ度々欺と
まごりもや其計策めぬおぬどやとらんべ。古手屋が今日其偽
り舌と枝んよ小来さるぞ。常言より借る時の地藏顔戻と
時の闇魔顔とらんべのことやうて。つらめく菩薩顔よてつひ

まんを内心夜又のつら女。今よとぬさぬ古衣服夜の物の貸代
残らど渡せ。つらつらとるべとらんべ米屋がつらとこれ返仕送をさる
米麦の代味噌塩の代。つらとぬせつで渡せと二人して。かろく色
あつらに喚ぐれば水草の奥へきこえてへと。心と痛め。両手とわげ
て。かれあつらにしてたぐよ。あつたかみの無理なつら。我身寺岡よ
とる心の露わさむとる。鉢も貧まうふ病人の看病もつら。て
ひさしく活計とらさる。償と物と心の外よなつらとる。ぬ
何ぞ今あむし待たたご。任ことな紙は入ど。いやく。无益の詞と
費と。今日是非とも受取て飯らあやあつらぬ。さつらて急よとぬと
物もあるまの貧乏之者よ似合さる。絹夜具や絹衣服の損料借

浮世草子全傳卷之三
二十一 尋来堂

さざめて奥の病人は著わかならん。剥きつてかへるべしと人む。
米商人のりひらる。我仕送つて代物の皆汝等と喰きてまらねば
覆水やそび盆よかくとど。取次をきまむとどとひひて。四辺を
見まへして。崩灯臺。破屏風。藻よとび虫のまれ鍋よ。幾世時雨の
古傘や見渡したる。野一ツとして價はなるとき物のなり。せめて
あの牛小屋の牛と牽て飯らなむ。瘦牛かれども少の價あり
かうしめさひひて。古手屋へ奥へ米屋へ牛小屋の方へゆくと立
あぐら。水草のわんで走りし。二人の袂よとどをびてさむれば。
とつとと踢倒し。二人の者の偏祖。手拭林がて。麩巻とし。臂を
押さうてひひらる。金のかりに絶の物と。さうてかむるへ情とひひりの

それさへさむらん我く。残らど損とささべしと。始りたるを
あつるゆなうあ。それかれがまき。も料簡かりがう。あまうしよ
かこあひねば。我くが契腸とまみ。がう。と罪マ一人の水草が襟首
つとて引倒し。一人の火炉のうらなる。燃杭さうて連打又打たれば。
火花をちと飛散て。時かぬ。蜜の集とる。如し。兩人の者。哈笑。汝の
男まうりのサまで。剣術。柔術。又達したるは。ま。借金とひひ
大敵よの手曲し。へたるま。歯が。汝とまへる。泣とる。無念
かろ。目よ。かひたて。なんとさる。白眼。ば。や。又。踢倒踏。う。ひ。く
踏。お。い。ま。奥。の。方。と。牛。小。屋。へ。又。ゆ。え。と。踏。出。と。水。草。の。葉。ま。う
二人の社と。さうてさむ。塗炭の拍子。火炉の葉。鏝。ひる。さうて

丹後国
 由良の
 漆乃悪漢
 泥六水草と
 殺して八重垣と
 奪ひ去んこと
 水草を亀
 池の魚を
 還着して
 復髪と
 ひきと

浮世丹全傳卷之三

廿二鳥来堂藏



咳詢てつてんとあつた水草へ去むと叫ぶ汝寺は借さ
物へとぬせーが。決方より貸た。物まごともぬ。とりくともて
飯をーとるべ。二人の者へ不審顔めて小首とつてけ。されの日
催促よ来つると。耳の痒さに筭とつた。わらに。何も借たる
おげんかーとつた。水草の。おげんかーと空虛者。今汝寺が
燃木とつて。妻と打割。踏つ踏つ。まらる。や忘。其返報と
うけとれとつて。二人が身よ手頭。つた。と見え。つた。つて手練
の景術の早業。二人一度。翻して。庭前。壁錢とどか。つた。
起し。立ど。最前の。燃机。まて。まら。と打。二人の。若。顔と
嘔。のか。痛。や。堪。が。や。ゆ。を。く。と。つ。ひ。く。高。道。一。鷹。よ。お。ん。ろ。く

偷起鳥の草がれ。如く。身とちめて。逃去ぬ。あ。こ。よ。れ
八重垣。胸と。枕。た。あ。つ。と。つ。居。たり。る。に。水草。の。ひ。ろ。ん。
前程。より。何。に。ま。だ。と。て。歩。病。床。と。う。ひ。を。と。ど。ゆ。ん。を。
彼。処。へ。お。い。て。お。ん。と。ひ。ん。ご。さ。れ。か。し。今。の。ゆ。か。か。と。お。ん。耳。よ
い。れ。あ。つ。た。と。つ。つ。八。重。垣。の。點。頭。で。打。た。れ。つ。立。行。ぬ。水草。の
獨。つ。と。萬。の。更。と。昔。よ。か。と。襟。と。肥。と。埋。火。の。灰。よ。りの。昏
後。前。の。思。案。あ。つ。つ。村。長。来。り。これ。水草。の。ひ。ろ。ん。と。あ。つ。つ。
来。つ。つ。つ。別。の。ゆ。れ。あ。つ。と。項。日。橋。立。の。入。海。殺。生。禁。断。の。所。よ。
夜。な。く。網。と。お。ら。と。の。あ。つ。と。心。と。つ。け。て。捕。う。べ。と。主。護。職。判。官
殿。より。嚴。命。せ。ら。れ。た。る。ゆ。ゆ。と。決。辺。の。漢。者。と。も。う。つ。つ。目。代。と

かりてつけ給ふに。一昨夜の子の刻過。風雨えげに海面
は。蓑笠あがり身とわく。たる曲者。船と漕来りて。網打とらふ
見つけ。號の鉦大鼓と打鳴りて。取巻たるが。其曲者。案外の早業とて
ついに捕ることあり。闇夜の裏に曲者の船と棄捨逃失しり。
其船へ橋立の渡船小てのりしなる。大勢の老疑のあたるりければ。
巖く兪弐と遂に村く。大騷動。あんやいらまご。知ざる
か。息もつらどに。語らる。八雲八重垣親子の者へ。病床乃
障子とわたり。押わけて。耳かき入けて。突居たり。時。水草
のひらるへ。さむり。巖と捉と犯と。毒よ。大膽なる輩ゆ
めるのりな。あらし。と。演者むの。手よ。ぬか。のり。のり。

尋常の曲者よ。あふ。か。ら。ど。女。む。り。の。住。居。よ。つ。ご。あ。る。う。こ。い。の
か。き。き。氣。づ。ひ。な。く。て。村。の。騷。ゆ。餘。所。吹。風。こ。ら。う。か。ど。の。氣。や。と
る。で。兪。角。野。よ。り。か。れ。村。の。た。ね。と。あ。り。入。り。は。ん。あ。の。づ。う。若。房
の。お。り。や。か。る。る。あ。か。氣。の。毒。や。波。茶。一。つ。と。さ。う。い。せ。村。長。の。茶。碗
と。取。て。ふ。と。ま。し。う。り。か。く。一。家。こ。て。も。疑。ひ。の。か。ら。ぬ。と。を。あ。り。も
り。ひ。ぐ。う。彼。曲。者。手。者。よ。似。合。ど。手。頭。い。と。瘦。や。と。う。腰。も。た。う。い
弱。氣。よ。て。蓑。笠。と。着。て。男。と。も。女。と。も。さ。う。い。う。う。秘。の。身。と。て。も
あ。ら。つ。た。て。居。ら。ん。ま。罪。の。か。ね。ぬ。天。の。細。波。の。栗。の。身。よ。あ。る。ま。あ
の。に。の。り。ど。と。な。ら。う。か。れ。ん。水。草。の。打。笑。つ。う。い。の。こ。ま。ふ。ぞ。毒。い。も
疑。ひ。の。か。き。と。や。以。村。よ。い。う。く。住。貧。さ。ら。し。の。り。と。せ。る。是。迄

塵一條物と掠りかかえたり。況その罪科と女の身かて犯と
つゝいそ色かた。若疑のわくるとも。いふ方説て多らまか。いふ人。
村長のそく。身よおがえかたなう。夫程めてたれ。いふなり。いふとも
か林てあつ。つらんが。彼様と破し者へ生か。う。簀巻をなして。
海彦よ沈る古法。ま。身の毛のい。なら。あかおを。わく
と。身ぶひして。飯り。暮行秋の日短。兎角。向
暗か。遠寺の鐘の音も返。宿よかへる群鳥。身よ。風
颯々。軒端と。とさ。空打か。水草へ。庭
あり。表の篋戸とさ。灯臺と取出して火と點し。
家内。見ま。て。名残。や。今夜。家。居。と。

口とと。獨言。硯取出し。各置め。懐紙よ。つけん。
折し。嗽の音。え。手早く。袂よ。時よ。八雲の
八重垣よ。抱。病の床。水草。と。叫。何事よ。述く。居。表。捕手。入。腹。巻。壁。手
膺。顛。巻。手。纏。打。村。長。案。内。提。灯。火。と
消。後。足。門。首。居。露。心。雲。膝。と。め。の
物。語。夫。三。存。生。の。時。の。頃。に。漢。女。網。打。の。観。音。詣。
仕。お。え。潜。る。蟬。の。業。ま。ど。去。る。頃。日。夜。毎。の。観。音。詣。
一。昨。夜。も。出。る。伊。波。吹。雨。風。の。え。げ。に。よ。今。夜。の。や。め。と。め。

家内の様子と見んたるを病入りの少女の
手業にて三人口と養ふべしと云ふれども殊に先刻商人と云ふ
五兩の金貸家と貯ふ所をなす彼らに是れは怪しむ
わきまあり。汝一昨夜大勢を取圍きて逃去たるを察してたる
橋立の渡船は。残し。わじ。魚網の。手繰の糸は結つきたる小
木札は。藻屑村と三つがきつひあり。これた。うかう。証拠は
あり。を。や。と。の。水。草。で。何。と。の。う。か。し。其。網。が。船。中。に。あり。し
か。ら。ひ。て。ら。く。驚。た。ま。ま。多。多。多。捕。手。の。長。の。り。り。ん。其。網。と。村。長。方。は
そ。う。お。た。し。に。其。夜。又。其。網。の。失。た。る。を。汝。が。業。よ。て。證。拠。と。棄。ひ
久。し。た。ら。ふ。う。い。ひ。な。し。た。と。證。拠。に。奪。と。も。を。脱。ぬ。こ。と。ら。う。う。

速に白状せよさむわらふ。其家も居る二人の女の連累の罪と申して
つらへとべし。若し白状せざるに於ては二人の女も捕へぬてひとや
は。あ。だ。と。も。よ。糾。明。と。ぐ。さ。な。り。を。と。ら。ひ。た。れ。ば。水。草。は。泣。き。の。て。り。や
嘔。ひ。の。と。と。と。ら。ぬ。事。へ。白。状。と。べ。し。詞。の。し。と。り。に。捕。手。の。長。板。も
膽。太。さ。女。め。う。か。骨。と。拘。て。も。り。の。さ。が。わ。お。く。べ。し。り。で。り。く。と。り。ひ。り。
蒲。の。傍。答。と。う。り。わ。び。て。連。打。は。打。た。れ。ば。隣。に。水。草。へ。髻。さ。れ。て
乱。髪。木。樺。も。碎。て。飛。散。つ。腕。は。ま。ひ。れ。背。の。腫。の。り。て。苦。痛。は。堪。え
打。倒。した。る。為。体。今。衆。の。新。亡。者。に。惡。鬼。羅。刹。の。手。に。と。ら。う。と。
呵。責。し。の。ん。に。異。多。う。と。目。も。め。て。ら。れ。ぬ。わ。り。さ。ぬ。な。う。か。く。し。て。も。白。状
せ。ら。ふ。二。人。の。女。と。彼。が。見。る。前。よ。て。責。噴。べ。し。と。下。知。と。れ。ば。少。も。宥。免

殺生禁断の海は夜なぐ綱とくせし一の妻あてひとひひきと
まると叫びてたれ伏八雲親子これと宮白状せしうかきりやと
ちよに倒きて嘆きさる。かゝる折しも七馬の女も四五人しをばく
来りて八重垣と取圍口女幾くひひらる。海松峠あて袖乞さる
汝此家よりときて来て来る。過る日我く。仲間よくく
誣はれどとひひて。編笠扇と投出。仲間のだたれば乞馬村よ
つれやかり。さうくのもりとりひて。八重垣が両手ととく引立て
かんとあけるほど。こゝれもゆふと驚く水草で捕手のとまが
引く。さうく自状のうへ羅科にみる。次女今夜の内は古法の
ごう。簀巻をかして海色もまぶらべり。うご立上とこのはしめり。

綱とさうてど引立て。難きよ難きのあさありなれば八雲のあ
れゆりさどして。捕手の長よひうひ何とぞ今暫所猶豫をされ
ごさんじとひひを馬寺よむひて。今とて一の間待たれよと双方で
とらあはれてひひらる。水草とひひ八重垣とひひ忠義の女孝行乃
子と持たが。我身一つの平運ゆを其のひとかわたかか。さよ過る日
八重垣が懐しう。取落したる布袋よ米麥小銭のあり。一か返叔の
観音詣とひひなりて袖乞さると心づき。うごかして耻ぢんと知
ど顔あて居しう。乞馬寺の物を野あて。さわるゆととととと
らひしう。後悔さよ。毒の中の娘子寺髪飾の飾や衣裳乃好も
容とつるが常なるに古編笠は破扇身をがしげか姿あて人乃

神の幅十間細高十余
 通の二五 間サマ



浮舟全傳卷之三

飛田の驛 國城 神宮 渡川 圖
 北 南 中 西 上
 蟹 村 村 村 川
 と 山 と と なる



浮舟全傳卷之三

袂たもとのころもぐら。袖そでをこして。父母ちちうはと養やしなふ心の殊勝しゆしやうさへたぐん
 まんたる孝かうと親おやの心こころへ思おもひなりの物見遊山ものみゆうざんは云い装まりて。其家そのやの
 前まへと往ゆ反かへる人の娘むすめと見るはけ。噫あや世よ母はは小こわらふ。我われ娘むすめもわの如ごとく
 は粧まへせて。うたふと持もちしとあり。さるに。身みの薄命うすなみは是非ぜいひわらや。
 幼少よゆうしやうより祇植ぎしょくして。絲竹ししやくのちるべ。和歌わがの道みち双ふた六む十じゆ種しゆ香貝かうがい合あ。
 閑雅かんやと業わざの嗜しやうと。伽羅がらのわゆる衣きぬさるも。重おもきとんば身みよおひ。
 又また衣きぬと薄うすうとんば。翠すい簾せんりの風かぜ小こゆつて。身みかろし。以も寒さむ天てん
 又また由よし檻ゐ襟えりのひと肌みとひく。足あしどして。辛あま苦く又また瘦やせるはららしと。
 其そのうへに。以も難あや美び乞こ巧くわうの仲間ちゆうま又またさる。つらなる。のむらむらと
 ついて。むせり。つらなる。水草すいそうは。わらへて。忠ちゆう美びの心こころへ深ふかけれ。と。

犯とがせし罪つみはまうぬれど。あなしく。其その體たいと奠あの餌食えしきとあつと
 ち。五臟ござう六腑ろくぷも悩なやみ。骨ほねぐも碎くだり。如ごとく。にちる。とや忠ちゆう美びの二字ふたごの
 むな。うて。未ま世せ未ま代だい罪つみ入いの汚名おとがなと。残のこと不便ふびんさる。とわぬ。ことを
 する。うて。前後ぜんご不ふ覺かく又また歎なげきさる。水草すいそうの始はじめ終しゆう覺悟かくごの体たい
 か。か。お歎なげき。さる。何なん度ども皆みな因果いんぐわづ。さる。おひ。うて。ぬ。ま。と
 八重垣やへがきさる。の。汚おとがなり。袖そでを。か。さ。る。と。さる。おひ。うて。ぬ。ま。と
 夫つま由よし妻つまが。ま。る。この。苦くると。救すけふ。と。お。が。め。と。お。心こころゆ。と。お。ひ。ま。と。ぬ。ま。と。
 ち。か。く。の。こ。の。八重垣やへがきい。と。妻つまより。か。か。不ふ便びんさる。と。さる。おひ。うて。ぬ。ま。と。
 名なく。我われ。宿世しゆくせの。思おもひ。報うへ。て。つら。憂うれ目めと。見る。こと。と。母上ははあさま様さま
 八重垣やへがき水草すいそう。汚おとが主人しゆうじんさる。これ。が。世よの。お。別わかれ。と。た。が。ひ。は。顔かほを。見みか。へ。と。

桶の五箇的。ゆゑありて橋立の海底に沈む。これを取上ると
そのに其在所と知りあつては、ついでに過つる。あつたの
星霜と換へり。彼海に鱗魚のあつた。其金氣と慕て集ふ
ゆゑなり。又毎月十六日の夜半に龍燈あつた。毎年正五九月の
十六夜は天燈降る。天神龍王彼法器と主護するゆゑなり。
某娑婆にありて殺生と業して。明暮物の命ととりしこと
数知ど其報にふりて悪趣に沈む。唯罪科をりし細の波へつて
猛火となりて身と焦し。因果のめぐり火の車に罪業と積む
て。貪欲の心ひく細の手馴し鱗魚今入つて悪臭毒蛇とあつて
紅蓮天紅蓮の氷は身と痛骨と碎む。あか昔しやと叫ぶ息の

焦熱大焦熱の炎とあり。雲霧たらし居よひまゆあつた。冥途の
責の度重き。何とぞ彼五箇の法器と取のけ。其功德をりて
成佛とありとむやと。願魔王は歎きまじりて。娑婆に往来する
こととゆるされ。天神の願龍王に乞ふ。夜か。彼所は細をくむ。
昨夜迄は五箇の法器と残り。取のけ。其望は遠く。是と教ん
るひかけと毒は疑ひか。天実の罪よからんと。憐れ。是と教ん
る。よこれまでわつた。出づるあり。往古より若彼法器と取のけ。
者への褒美とたまはる。定めれば。この秘がく。其褒美と毒は
たまはる。彼が貪苦を救ひ。慈悲の志と達せし。とされが。く
上人法器と渡し。かき。とら。法器とく。とく。来り

寺正丹三

三十三



瑤島磯之丞僕
弓助



大鳥
嵯峨右衛門僕
堂九郎

其二

寺正丹三

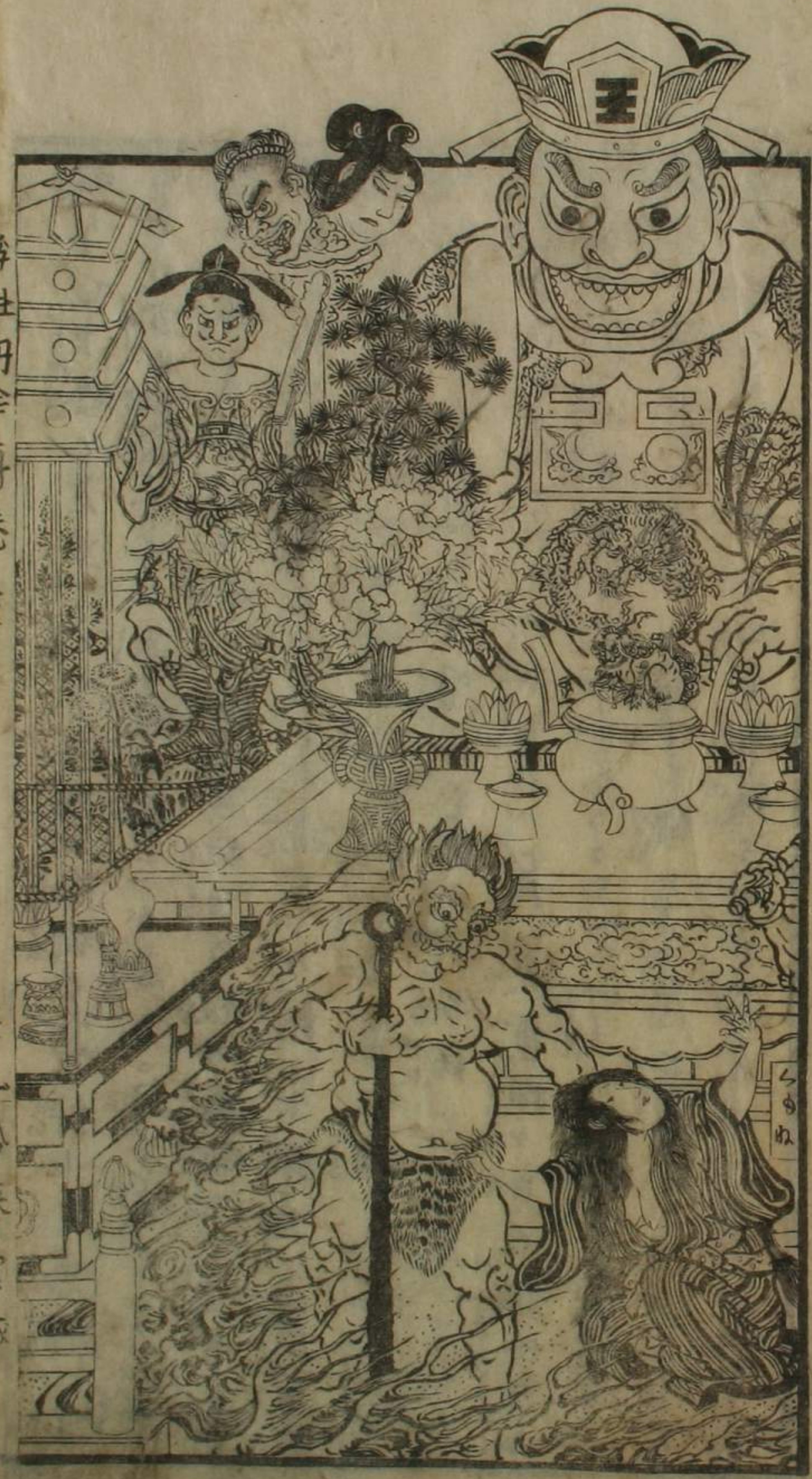
三十三

見え上入袈裟と脱てうろくこれを受うるも再又一陳の
 風吹て與三ヶ姿の消をせり。上入をもめ皆く奇異のちひをほるも
 捕手の長水草まひうひて汝身まおがえりなると。何ぞ自己
 かせしそいひつるぞとくふ。水草いそく。不情うた問ひごと哉
 充実の罪とわさううにせんともれぬ。浄主人母子の命危りし。
 仏壇の細の失しうもてのり符合したるも妻が身ま火の
 かくるも時節到来とわさうも妻が命一つと捨て浄主人母子と
 たきけん為し。充実の罪とさつるやうとらふも。八雲ハ益其志と
 感し。まばさくかど類まれなる忠義か。ささうわさうする身ふて
 商人につらしたる金の出所といふごのハ何ゆゑと尋ねるも

水草いそく。事明白になりつるうへ。其ゆもつまど語らば。
 浄二方と心の休に養ひまわらせんとお心し。実ハ來身を
 働便又賣べき約となし。かの金の其証又取つる金よて。かくるゆ
 なけれ。明日ハ身と賣て。宮津の宿まなるべ。答よい。此ゆと
 わさううにさこえか。ごめめあふハ必定とぞん。深くつみかせ
 かくつて御疑の種とありぬと人ハ捕手の輩今ハ半點の疑つさ
 所なし。さて。いまの繩とさたなるにぞ。水草ハ森ハ夫乃靈魂
 の告るゆ。危し。際ハ濡衣を。ぬごつるゆの嬉しやとつひて
 吐息をれば。雲もよめに蘇息するところちし。胸と極てぞ
 居たりける。時よ乞巧の女寺とくみ出そちんを。て。ゆ此方ハ

とそがし。いざしくとひてハ重垣と又由ひつたて出ける濱
づひに明松ととりつれて。次家とさして来る者わ。巴と並ぶ
て見れば。烏帽子と風に吹。そくさせ。縹乃素襖の袖を巻あげて。
袴のくまを高くむをびあげる。武士竹のむしに包文とさし
えさとしてさげ。一合の長唐櫃を従者に小多し。明松を前
よて。次家と到り。捕手の輩。これを見るといはして。下座と
あてひく。なる。村長由平伏し。乞巧む。庭の片隅。又屈む。けり。
彼武士上座につきて。わく。某の当地の主護職由良判官乃
郎等。港口兵衛。さつ。者あり。今次家と来つ。こと別。後にあつ。
京都足利。美政公頃。日一夜の所。夢。又。殊。廿。廿。わ。れ。ぬ。の。往。古。

橋立の海。沈る。五箇の法器。以度出現。とぞ。時。到。て。冥。府
の者。娑婆。は。往。来。して。これ。と。取。あ。ら。る。る。べし。彼。所。と。殺。生。禁
断。と。さ。し。め。し。原。彼。法。器。あ。る。中。を。か。れ。ば。以。後。の。彼。掟。と。止。べし。
冥。夢。の。告。あり。し。に。よ。り。て。俄。又。台。命。と。く。さ。れ。法。器。出。現。せ。し。を
切。戸。の。文。殊。堂。と。さ。し。し。り。又。以。後。の。殺。生。禁。断。と。止。べし。と。かくの
如。く。今。書。と。た。ま。さ。り。ぬ。彼。曲。者。と。捕。へ。し。時。與。三。が。卒。都。婆。の。錢。り
と。る。ゆ。以。ゆ。に。符。合。と。れ。ば。與。三。が。冥。魂。法。器。と。取。あ。げ。ら。る。疑。い
あ。ら。ず。と。ぞ。主。君。判。官。の。命。然。う。け。あ。ら。る。や。い。ま。や。と。糾。ん。た。ら。ぬ
来。ま。さ。り。と。り。て。碓。波。寺。の。上。人。ら。や。く。く。ら。ひ。さ。る。の。其。み。と。と。し。も
た。が。い。ど。の。か。様。々。と。よ。い。と。て。與。三。が。冥。魂。の。告。ら。る。と。く。ら。い。く



わ責は現於殿間雲村
 入は呵前くは羅根婦



語りて。法器と見せしむるに。港口兵衛これと拜して感嘆し。
 古の定のこころ。褒養の與三が妻よこころとて。唐
 櫃の裏より白木の臺に積た。紅白の綾の巻物三十疋をさ
 りて。水草が前よと多させ。青ざりの銭二十貫文と出せりて
 上人にむかひ。これ彼法器供養の爲を馬もに施し。
 上人志むく。法器と佛壇よと多あは。此後とうけりて。
 のせむにむかひ。これに幸かれば。これと八重垣が身の穢と清る
 料儀とて。汝寺よつとせ。あつと一言のり。
 汝寺が此の法器と對して穢なり。これとて。
 けり。右舌むかひ。疎々出て。此後をうけり。皆打連とて。

借八雲の先程よりの歎きに身体と疲し。今又急よ安堵して
 張つたる気のゆるゆるゆあや。いま九月なれども俄に産け
 づ。果して難産ふて。七轉八倒して。苦しみ。八重垣水草
 介抱し。これにむかひ。八雲のわが苦し。
 やと嘔吐つ。のけさぬに倒さけりて。背後またた。明障子と。
 瓦落々々と打倒したるに。一目見渡を橋立の空も海も一面は
 赫々と光り。観る。北へ宮津の通ひ路。
 切戸に名高き文殊堂三角五輪と称する。平井保昌が碑石海に
 さし出て。並松の蒼々と連なる洲崎小へ橋立の明神あり。
 清水の涌泉あり。西方へ柄尻村一宮大明神。籠守社成相の觀

音堂十八町坂府中村南の方へ苦棟峠男山村岩瀧村金峯白
糸濱かんご画ける如き絶景と居あつたがむら住家かて眺望
无双の所なれば映光よ糸とてうらなば松の下枝の珠手あつち
群て鳴鶴の翼の裏までもめくんに見えて岩の碎る白波の
数さくかぞへどどられる。時よ八雲の倒さるまて息絶るれば
又も歎とちりるに忽海底より龍燈出現し。虚空より天燈
降り。彼法器と主護とをこええと。漸々よりうづき来りて。其家乃
前にてまうりるが。映霊火の徳よやうらん。頓て八雲の蘇息起
上るとひとしく安産して。玉のこけた男子と産頻よ初色とあが
るるにぞ。八重垣水草ごうらるるひつとどぶらむのうらるる。此時

彼病床よ生かまつる冬牡丹の花陸離と散らるる。此日これ九月
十六日にて彼花のひくは日し。九日目よわらう。男子出生あり
けるも其名にうづる廿日草花の富貴と此子よゆづりて散りし
かり。此子の生きたのりくと益森び勇々。港口兵衛上人よ
ひくいてのそ。漸時刻移りぬれば。清才の法器と携て今夜の中よ
文殊堂よとさめいへ。某寺の路次の警固とつとてべり。とくへ上人再法
器ととり。袈裟よつとみてこれとさげ。與三ヶ率都婆と奥細の
後の証よ我寺よとびべり。これと同宿の両僧よ持し。天燈
同音よ読経して出ま。港口兵衛の前よ立て。遠出する。天燈
龍燈の空高く是よつたてとむに。挿手の輩のいそぐ。願卷

手纏と取捨て押張るる腕とゆめ握つたる拳とひらき合掌して
隨喜の涙と流して後よつげば村長の俄又菩提心と起て後よ
あごがひ濱づつひに遠行するに益天地暉て金色の世界となり 日月
灯仏。名聞光仏。大焰肩仏。須弥灯仏の来迎のりりと疑人いなり
光りもる海面は波風立ちあがり鳴動して下界の龍神其丈
千尋の金龍となりて出現し波と踢起水とかくして番まらむ
波の末の飛散由金銀珠玉と降るる。濱の細砂小貝の類の
光又映して七宝充滿の宝と布りてのりまらむ。空よい妙なる
音楽聞え灵香四方に薫トや青色青光白色白光の蓮華
と雨一五色の彩雲布满て比沼の山のわたりし。白衣黒衣の

天人現ト来りて霓裳羽衣の曲となり。天樂歌頌の甚微妙なり。
或ハ天津より緑の衣又ハ春立霞の衣色香も妙なり。己乃裳
さゆらさ。さやう 珮々の花とわびしの瓔珞も天の羽袖よりらさる。又
微風よなびくとわらさる。皆く恭敬礼拜を上人感涙と流て
いそ。文殊師利法王の化度よりして娑竭羅龍王の女年八歳よ
して菩薩行と具し。南方无垢世界より生とくる。これ女人成仏の
始なるべ龍王天女文珠の法器と主護するも理なり。あかた人よや
わらさる。天人所戴仰龍神威恭敬と提婆品と誦誦して
遠行ば天灯龍燈ハあかたにさるる。彩雲ハさるる。白鶴孔雀鸚鵡舍利
も。幢幡宝蓋とさるる。あかたさるる。白鶴孔雀鸚鵡舍利

迦陵頻伽種々奇妙雜色の鳥孤雲の外又舞遊金銀瑠璃
の色と欺く異類の鱗魚波よりのみて歡喜踊躍の体をあそぶ素
衆生濟度の誓文殊の智慧をうけつぎ弘法大師感得乃法器
の奇特ありて極樂国土の莊嚴もわくどありとおもはれて
八雲八重垣水草等ハ跡見かたりて伏拜むゆふたよと光景あり
今又毎月十六日の夜半ハ龍燈ありりりり毎年正五九月の十六
夜ハ天燈天降も法器と守護のゆきとまんハ重垣ハ身と沈んと
のありたる岩も今にありて里人これと身投石とよなる阿漕の網を
ひく波のあそべれハ似たる物語七世の孫もまつり浦嶋が子の常
世の濱内典外典またありたり内外の濱の松風の波もぐるるあり

與謝の海後ハ文字と書かして與三の海ともとありたり
いそれハかくとひひつらん

○天燈

和漢三才會。天橋立の條ハ毎年正五九月十六夜
一火天より降る。これと天燈とひひつらん。

○龍燈

拾芥抄ニ云。智恩寺ハ丹後九世戸の文殊天竜
六齋燈明と供じく云。和漢三才會ニ云。橋立の
龍火。毎月十六日の夜半の後ハ丑寅の右の海濱
より出。文殊堂の北辺ハ浮寄云。

○龍燈松

九世戸。天橋山智恩寺の境内。松樹多し。一本絶て
高長かるあり。龍燈の松と称ど。枝葉まけりて。菴と
戴が如し。絶海和尚の詩あり

碧海中央六里松
夜深入待龍燈出

天橋絶勝是仙蹤
月落文殊堂裏鐘

○身投石

宮津の巻し。天橋立に到る濱辺は路あり。浪打際
五六尺許の岩あり。これと身投石と云ふ。

浮牡丹全傳卷之三終

○以稗史全部九冊あり。著述遅滞して。発見乃ちこれ
か。これに。書肆且四冊と刻し。前帙となりて。発見せん

こと。彫刻の時は迫ぬべ。絵と施よいとある。第五卷
目よある。せり。ゆり。絵と。映よ。出せり。俠者釣船三撫夜中

孩児と救ふ。音水草が魂魄魚鼈よ。還着る。音飛驒の國
籃渡の音村婦。閻羅殿にて現前呵責よ。音都て其

事。第五卷目。第八卷目。あり。後帙発行の時と俟得て
んる。盡し。

○以下回浪華の俠者釣船の三抚八雲が産する孩児と救ふ。

水草が兄泥六水草と殺して八重垣と奪ひ孩児と蓮池に
投いる。水草が魂魄魚鼈を還着して孩児と救ふ。大鳥嗟味
右衛門泥六と欺て八重垣と奪ひ由良の港口の人商人を賣水草が
家の佛壇よそへおたて。父畑作が遺留物の鎌まらびおらして
泥六が額よたら畑作が魂魄牛のうらうら。泥六とくらして橋立の
海よ沈む。牛石のいよん宮津道よめ。大の堂鶏塚のいよん寺を。
第五巻目よあるして。後秩の首巻とて。後之丞弓助とともよ。旅
虚无僧とたりて。飛驒國よ倒り。嵯峨右衛門がゆへをくらぬ。弓助
神通川の藍渡の藍の裏にたて堂九郎よ出會。堂九郎弓助と欺打よ
去て金と奪ふ。窮奇其金と取くして。碓之丞よ与ふ。弓助が灵感

嵯峨右衛門が行方と告る。碓之丞越中國よ赴み。石生團七泉州
堺よ到て。奥商人とたり。黒兵衛と名と更る。人是と團七黒兵衛と
いふ。出齒屯丁の鍛冶一寸徳兵衛妹琴浦と團七が家よあけけり。
團七が妻が梶が父蟻平次團七夫婦と欺て琴浦と瓢箪巻の茨
木屋休齋が家よ賣一寸徳兵衛團七と疑て打果えんと。釣船の
三抚是とたてりて。琴浦が行方と語る。大坂天満の神事けり。蟻
平次團七と欺打よせんとして。團七が靴よわらして。死を團七妻
於梶と離縁し。一子市松と勘当を市松孝心深み。於梶市松を
殺んとし。おのれ自害せんとして。團七をれとさる。本心とあけて。腹を
きしんとし。一寸徳兵衛團七が罪よかりて。囚ら。鳩八拘れんと

なりて城平次が奮悪と告る。嵯峨右衛門越中国赤波山の
村婦雲根と妻とを八重垣夕露と名と更金齋病と申して化石
谷の捨らる。細呂木長者牡丹と愛と長者化石谷を八重垣を
救入磯之巫赤波山の間覺堂と宿し。村婦の可責あり入を
見る堂九郎化石谷にて磯之巫とやり打せんとも。弓助が灵
魂人面石と通して是と救入磯之巫堂九郎と打。此一回總て
化石奇石の事と尽てけく。八重垣観音の擁護よりして
奇病とまぬ。細呂木の婢女となり。観音と信とて厨乃
流しより光明と発し危難とまぬ。観音経大蛇と化して
雲根と巻殺と磯之巫蛤蜊観音の告より。女郎花姫乃

再生よりあ貝合の貝の。嵯峨右衛門がやへ再るる。一
寸徳兵衛磯之巫八重垣と連て堀は飯る八雲磯之巫八重垣
再會の。團七夫婦徳兵衛兄弟誠忠の。琴浦忠の為
浮身宿と身を賣り。浮身宿の考。琴浦後より越前の三国
又賣りえられて小女郎とあり。阿曾比とあり。狐の余とあり。
狐恩とあり。小女郎が難義と救。小女郎狐のり。以上五冊
又昏ちて後帙と。近日発行へ。以前帙と合て
一覽とあり。ごさかうと

江戸作者

京傳編



江戸繪師

豊廣画



いっかつかき

徳じやうえん



えん木下

新八



浮牡丹全傳

後帙五冊

山東京傳作 近日發行
歌川豊廣画

女豫讓檻物語

前編五冊

山東京傳作 近刻
歌川豊廣画

京傳店商物口上

○きれぢぢとたをこ入類きせる類めがじきあんがと
風流の雅品のまじり○京傳白画さんあきわりの書齋とたうく
讀書丸一包をぬふらて○才一きんをばりしおおやえんはくし心腎はきま
そんとおきある老若男女の才とつらんどびつて公と男をる人をして生れ付
よまに人用ひてよし縁の利急にもたくりかべし

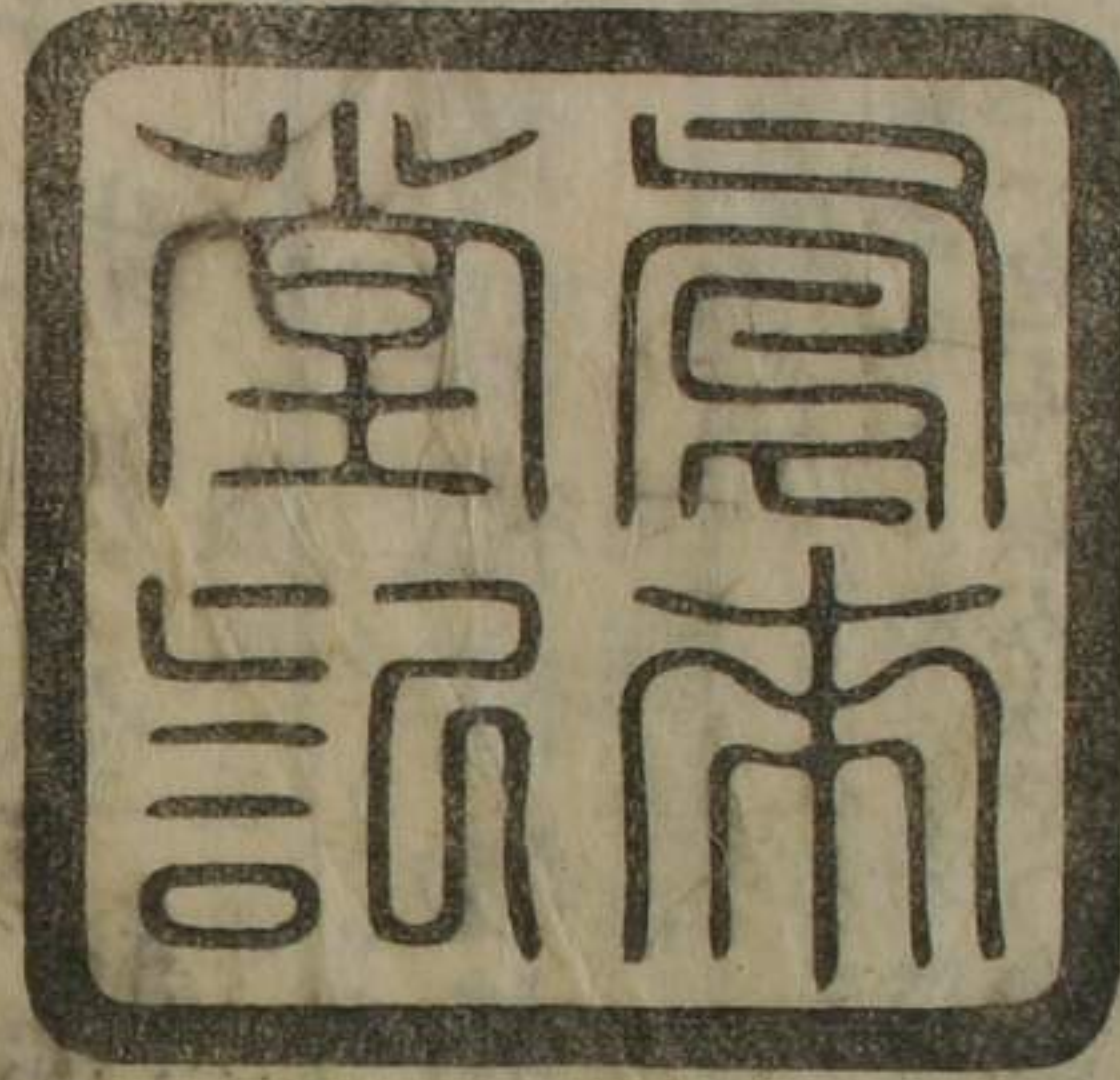
加味奇應丸

せんに類あつた茶なれど私方へ家傳の中、ち面瓜合人あん
くまののちあつた類あつた瓜あんせど云むんとえんをて
極品のやくまをとりつて洞合とゆゑにせんの類茶と云ふ切格列のりちり
あつたたまへとさわり

浮牡丹全傳卷之三

早七終一學来堂藏

鳳來堂記



文化六年己巳正月發行

書林

江戸本石町十軒店

西村宗七 梓

同

四谷傳馬町二丁目
住吉屋政五郎

行

海山加公之印

三冊

いさゝか

本



